

國學院大學學術情報リポジトリ

近世国学者の靈魂觀をめぐる思想と行動の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 久史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001760

「近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」

松本久史

はじめに——経緯

昭和30年の日本文化研究所設立以来、「設立の趣旨」に則った研究課題のひとつとして、国学に関する研究は継続的に行われ、多くの成果を残してきた(松本久史「日本文化研究所における国学研究の歩み」『荷田春満の国学と神道史』弘文堂 平成17年 参照)。この歴史的経緯に鑑み、平成19年4月に研究開発推進機構のもとに再編された日本文化研究所においても、規程により恒常的な研究部門として「神道・国学研究部門」が設置され、新たに本プロジェクトが立てられることとなった。

目的と方法

本居宣長の展開した黄泉国論や「安心なきが神道の安心」と説いた他界・靈魂観は国学者の靈魂観の代表的な主張のひとつと理解され、研究の蓄積もなされている。一方では、平田篤胤が『靈能真柱』で展開した幽冥界の主張も、国学者の靈魂観・他界観の代表的なものとして捉えられてきた。村岡典嗣が『本居宣長』(初版は明治43年)において、宣長まで文献学的な性格の強かった国学を篤胤が他界観を導入することによって宗教化したと論じて以降、その構図が定説化し、国学者の靈魂観といえば、篤胤以降が中心的な対象となっている。複数の国学者の著述に見られる靈魂観の言説を抽出して比較し、相互の影響関係を考察するというものが、従来の国学研究における靈魂観を検討するオーソドックスな手法であっ

たといえよう。しかしそれらの考察は、思想「そのもの」が生起する要因と社会实践の関係を十分に説明できていないのではないかという問題意識が本プロジェクトを発足する上での共通認識としてあった(平田篤胤と気吹舎の思想と実践の関係については、遠藤潤『平田国学と近世社会』ペリカン社 平成20年 参照)。たとえば、六人部是香、矢野玄道ら気吹舎の門人や大国隆正などの靈魂観が、明治維新以降の神道国教化政策、大教宣布運動、祭神論争など、明治初期の政府の神道・神社政策にどれほどの影響を与えているのかといった検証すら充分ではないのが現状ではなかろうか。

具体的に国学者の靈魂観に基づいた「実践」という場合、第一に神葬祭運動が想起されるであろう。例えば、石見国の鈴門系国学者の岡熊臣などは、国学者の思想(靈魂観・他界観に関する著述)と行動(神葬祭運動)の関係を示す好例である(加藤隆久『神道津和野教学の研究』・『岡熊臣集 神道津和野教学の研究』上・下巻 国書刊行会 昭和60年 参照)。ところが、近世寺檀制度の中で、神葬祭は基本的には神職固有の問題であり、国学者全体に共有・実践されていたわけではない。そのため、全国の国学者たちが「死者の靈魂を祀る」行為として執行した、「靈祭」や「年祭」にまで対象を広げて考察し、さらに、幕末に偏っている時代も遡って検討することとした。考察の基点としては18世紀前半における荷田派の靈祭や神葬祭運動を想定した。同派の神職門人による神葬祭の執行、続いて19世紀の遠江国における高林方朗を

中心とした宣長・真淵の靈祭執行と県居靈社建立運動の展開、それと対応する形での幕末期の三河国における草鹿砥宣隆・羽田野敬雄らの平田派の実践活動に着目した。このように、平田派に限定せず、かつ近世の中期から幕末期に及ぶ調査対象期間を設定した。また、思想そのものの実証的な検証もこれらと並行して行うことし、具体的には靈魂觀の表明されている諸テキストを対象として、成立の過程、写本の伝本、版本の刊行形態をも含めた検証を進めた。

このように、対象と時代を共に幅広く取ることによって、近世における国学者の靈魂觀と実践との関係についての実証的研究を進展させることが本プロジェクトの目的である。

平成19年度の活動内容

1、『靈能真柱』の再検討

さて、国学的靈魂觀を考えていく上で検討対象となるテキストとしては、平田篤胤の『靈能真柱』がまず挙げられるであろう。篤胤の靈魂觀が、本居宣長および『三大考』の服部中庸説、あるいは他の先行する諸思想に対して異質な要素を孕んだものであることは周知の事実であり、西洋天文学の知識をも包摂しながら、その後の国学者による他界論の水準をも規定していったという意味で、画期的な業績である。そこで『靈能真柱』の所在状況調査を最初の作業課題とした。近年、歴史学の分野での「読書」研究の進展は、思想が社会の中で実在した一形態として、「モノ」としてのテキストへの着目を必然化しており、こうした基礎的な事実の確認から出発したのである。

その作業を行った結果として、

- ① 刊記及び巻末に添付された書目から判断するに、菅能屋本を含め最低四版が存在する。
- ② それらには、送り仮名などに細かな改訂がある。
- ③ 西尾市岩瀬文庫に所蔵されている一本は、

篤胤が夏目襄麿に送った出版前のヴァージョンである。

- ④ 国立歴史民俗博物館所蔵の平田家資料中には、出版の前段階のヴァージョンこそ確認されないものの、寄せられた序文が存在し、また「靈能真柱」を講本化しようとした形跡が窺われる。

- ⑤ 現行の校註本では、底本の伝来が必ずしも明らかにされていない。

といった事柄が明らかになった。

①、②は『靈能真柱』の内容が一貫して不変であったわけではないことを示唆している。そこからは、『靈能真柱』の諸版中の異同が思想的変化と呼べるレベルのものなのかどうか、という問いが提起される。しかし、⑤のような事実から見れば、現在は『靈能真柱』の流布当初の形を把握することが実証的な議論の前提として不可欠な段階である。確実な底本に拠ったテキストの校訂こそが、基礎的な作業として重要であることが確認された。③からは、校正刷から判る篤胤の議論の初発的形態と、流布時の形との間に、差異があったかどうかの検討が、課題として導き出される。④もまた、こうした靈魂觀の流布にあたっての社会史的・思想史的分析の材料になるものであり、歴博への探訪調査が課題となった。

こうした分析を踏まえ、平成20年2月に実施した資料調査の目的地の一つとして西尾市岩瀬文庫を選択するとともに、確実な底本に基く『靈能真柱』の新たな校註作製、およびそのデジタル公開が課題として浮上した。

『靈能真柱』の新規校註は、確実な論拠を提示していくものである一方、一言一句をないがしろにせず読んでいくことで、篤胤の靈魂觀を理解するという、最も根源的な研究作業でもある。この課題と向き合うにあたっては、議論の豊饒化・活発化を期して広く研究所に關係する若手研究者を募って研究会を立ち上げることとし、本プロジェクトではその

ための底本の選定及び具体的な運営手順の検討を実施した。こうした作業を継承するため、平成20年度の後継プロジェクトにおいて「霊能真柱を読む会」を立ち上げている。

2、関連書目の集成

『霊能真柱』に限らず、国学的靈魂観を研究するにあたっては、靈魂のあり方について論じた著作や、靈魂観がうかがえる史料の参照が不可欠である。そこで本プロジェクトでは、関連する著作・史料をリスト化する作業に着手した。作業にあたっては、多くの国学者の靈魂論を収載した『神道大系 諸家神道(上)』(小笠原春夫校注 神道大系編纂会 昭和63年)や、『三大考』及びそれをめぐる論争について扱った金沢英之『宣長と『三大考』近世日本の神話的世界像』(笠間書院 平成17年)など、先学の成果を参照しながら、靈魂観を考えるための材料を全体的に把握することに努めた。これはまた後継プロジェクトに継承され、内容の充実が図られている。

3、東三河神葬祭・国学的靈魂観関係資料調査報告

平成20年2月14日から16日にかけて、三河地方への史料調査を実施した(出張者 遠藤潤・三ツ松誠)。「思想」と「行動」の両面からの研究を題目に掲げる本プロジェクトにおける重点的な研究対象地域のひとつが三河地方であり、この地域の平田門人——ひいては全国——の神葬祭運動の展開に重要な役割を果たした羽田野敬雄の創設した羽田文庫の旧蔵本を収める豊橋市中央図書館および西尾市岩瀬文庫を調査先として選定した。具体的な調査史料としては、まず神葬祭関係を第一に考え、次いでその他の靈魂論に関する著述の中から希少性が高いと考えられるものを閲覧することにした。その際、かつて日本文化研究所が昭和50年代に行った事業の中で調査が行われたもの(『日本文化研究所報』

111・121・122号 参照)をも含めて、原史料を実見して調査を実施した。

3月14・15日は羽田文庫旧蔵本の大半を収蔵する豊橋市中央図書館を訪れ、館側のご厚意により、現物閲覧およびデジタルカメラによる撮影を行った。次いで、16日には、岩瀬文庫にて調査を行なった。同文庫は私設の図書館として出発し、現在は市立の博物館となっており、近世を中心とした版本・写本の特色あるコレクションを有していることで知られている。施設は平成15年にリニューアルされて、現在も所蔵資料の調査が進められている(岩瀬文庫ホームページ <http://www.city.nishio.aichi.jp/kaforuda/40iwase/>)。ここでは、神葬祭・靈魂観に関する所蔵資料を閲覧し、あわせて開催中の新出資料の展示の見学、および担当者による解説会を聴講した。寺津八幡祠官である国学者、渡辺政香の関係資料をはじめとした解説や富士谷御杖による書き入れ本なども閲覧した。今回の調査では重要資料の閲覧を行って書誌データを採るに留まったが、それらを精査して再調査・撮影を後継プロジェクトで実施していくこととした。

以下、調査したもののなかから、注目される史料を紹介する。

・『幽蹟論 上下合巻』写本1冊。前野包廣著、慶応元年大江(竹尾)正胤写。羽田文庫旧蔵本、「幾上」の朱筆あり。

「平田老翁」(篤胤)の顕幽二元的世界像を受容した著述であり、記紀や祝詞等に拠って世界の成り立ちを説く。しかし、人と神とを峻別する点に特徴があり、青人草と天孫降臨に先駆けて幽界に入った神々を明確に区別して、「現人神」の絶対性・他の人々との断絶性を強調する。この書に見られる神と人とが根本的に異なるものであるとした上で天皇を神の側に置く考え方は、人が死後神になるとする篤胤の見解とはやや力点が異なるように見え、書写者の竹尾正胤の見解にも通じ

るものがある(岸野俊彦『幕藩制国家における国学』校倉書房 平成10年 など参照)。『国書総目録』によればこれ一本のみ。他に前野には、『国造本紀考説』などの著作がある。・『たまのみはしら 上下』版本1冊。平田篤胤。

出版以前のバージョンが遠江国の宣長門、夏目襲麿に進呈されたもの。後に襲麿から息子の加納諸平へ譲られたと伝えられる。留板ありの上下合本で、墨筆また朱筆による書き入れが散在する。襲麿は文化年間の三大考・靈能真柱論争で本居大平と篤胤を仲介した人物でもあり、『靈能真柱』の現存する最初期のバージョンとして注目され、内容の検討が必要である。

4、高玉安兄宛平田鍊胤書簡の翻刻

さらに、従来から日本文化研究所の関連プロジェクトにおいて継続している、奥州相馬の篤胤門人の高玉安兄宛の平田鍊胤書簡については、本プロジェクトが継承することとな

り、一年を通じて定期的に研究会を開催し、解読を進めた。そのうち35通分の書簡については、翻刻を平成20年3月発行の『紀要』第100号に掲載した。

おわりに——成果と課題

近世国学者の靈魂観についてのテキストと、それにかかわる実践を総合していくという本プロジェクトが掲げた目的のうち、テキストについてはある程度の基盤的な調査・研究の進捗を見たが、実践面の考察については不十分であったことは否めない。しかし、本プロジェクトは組織再編に伴う経過措置として期間を1年と定めたものであって、問題意識や研究成果は20年度から3年計画で始まった「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」に直接継承されている。研究会の継続や立ち上げについては20年度に着手されており、実践面の調査も具体的な現地調査計画が立案されている。